



Title	The Syntax of Passive Constructions
Author(s)	Honda, Takahiro
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ほん だ たか ひろ 裕 本 田 隆 裕
博士の専攻分野の名称	博 士 (文学)
学 位 記 番 号	第 2 6 0 6 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	The Syntax of Passive Constructions (受動文の統語論研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大庭 幸男 (副査) 教 授 岡田 禎之 教 授 加藤 正治 教 授 神山 孝夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、生成文法理論の **Minimalist Program** の枠組みで、受動文の統語構造を分析したものである。先行研究において、受動文とは、動詞から対格を付与されなくなった目的語が主格を付与されるため主語位置に繰り上がる構文であると考えられてきた。しかし、実際には受動文でも対格が付与される例が存在し、このような説明には問題があると言える。本論文の目標は、通常の受動文だけでなく対格が付与される受動文についても説明可能な統語構造を提案し、その構造に基づいて、イディオムの受動文、擬似受動文、知覚動詞・使役動詞の受動文がどのように派生されるかについて説明することにある。全体は 6 章からなり、総頁数は英文で A4 判 212 頁 (400 字詰め原稿用紙に換算して約 640 枚に相当する) である。

第 1 章では、受動化は単なる語彙的な操作ではなく統語的な操作により派生されることを確認した上で、受動文における内項の主語位置への移動について説明し、第 2 章から第 5 章で取り上げる現象を概観する。

第 2 章では、受動文の統語構造について考察する。受動文と非対格動詞文においては構造格としての対格が付与されないという観察から、近年の **Minimalist Program** では、どちらの構文の構造も同じであると主張されている。本章では、この主張に対し、英語、日本語、ノルウェー語の二重目的語構文や日本語の所有者繰り上げ構文の受動文に見られる対格は構造格としての対格であるということを指摘し、受動文は非対格動詞文とは異なる構造であると提案する。また、受動文は理由節との共起が可能であることにより、受動文には非対格動詞文とは異なり外項が暗黙項として存在しなければならないと考え、受動文の構造は非対格動詞文よりもむしろ他動詞を伴う能動文に類似した構造であると主張する。受動文の構造が他動詞を伴う能動文と同じような構造であると仮定すれば、どのようにして内項が主語位置まで移動するのかという疑問が生じるが、本章では、受動文において内項が主語位置に移動する前に一旦外項の上の位置に移動するという **Matsuoka (2003)** の提案を採用する。**Matsuoka** 自身は日本語受動文においてニョッテ句が項として現れることを説明するためにこのような提案を行っているが、本論文ではこの主張を受動文における対格付与を説明するために採用する。この提案により、二重目的語構文や所有者繰り上げ構文の受動文においては、受動文の主語になる項以外の項が元位置に残ることから、これらの項

に能動文と同様に対格が付与されることが説明できる。この他、英語の受動文において **be** 動詞が現れる理由や **have** 受動文についても議論する。

第 3 章では、日本語と英語におけるイディオムの受動化について議論する。本章では、イディオムを一義的な解釈しか持たないイディオム (**Type I**) とイディオム解釈と文字通りの解釈の両方が可能であるイディオム (**Type II**) に分類し、**Type II** が受動化できないことを指摘してその理由を説明する。また、日本語では **Type II** が語順の関係より受動化できる例を示し、その理由について議論する。

第 4 章では、前置詞の目的語が受動文の主語になる擬似受動文の派生について議論する。先行研究において、擬似受動文は動詞と前置詞が再分析により一つの複合動詞となることで派生されると考えられてきたが、その分析では説明できない例が存在する。そこで、前置詞は対格を付与する他動詞や主格を付与する時制とは異なる方法で名詞に格を付与すると仮定し、再分析を用いない擬似受動文の派生方法を提案する。

第 5 章では、原形不定詞句を補部を取る知覚動詞・使役動詞の受動化について取り上げる。学校文法では、これらの動詞は能動文では原形不定詞句を補部に取り、受動文では **to** 不定詞句を補部にと取られている。これに対し、両者の間に能動文・受動文の関係は成立せず、原形不定詞句を補部を取る動詞は受動化が不可能であり、**to** 不定詞句を補部を取る受動文は **wager** 類動詞構文に類似した別の構造を持っていると提案する。そして、最後の第 6 章は本論文の結論である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の目的は、生成文法理論の **Minimalist Program** の枠組みで、受動文の統語構造を明らかにし、それに基づき、イディオムの受動文、擬似受動文、知覚動詞・使役動詞の受動文の派生方法を説明することにある。そのために提案された受動文の構造と受動文における対格付与システムは、これまでの提案と異なる申請者独自のもので、今後の受動文分析に大きく寄与するものと思われる。

本論文の評価すべき点は、このような受動文における対格付与の問題を契機として、擬似受動文や、これまであまり取り上げられることのなかったイディオムの受動化、知覚・使役動詞の受動化に認められる不定詞形の変化など、古くから知られている現象に対して、斬新な解決方法を模索しようとしていることにある。具体的には、擬似受動文では、先行研究で提案されてきた再分析について反例をあげながらその問題点を指摘し、再分析を仮定せずにこの種の受動文を派生する方法を提案している。また、イディオムを上記のように **Type I** と **Type II** (前者の例は英語の “**take advantage of NP**” や日本語の「注意を払う」などであり、後者の例は英語の “**kick the bucket**” や日本語の「ゴマをする」などである) に分類し、**Type II** のイディオムが受動化できない理由をこの 2 つのイディオムを区別する意味統語的な特性と **Miyagawa (2005, 2007, 2010)** の **focus-agreement parameter** 分析に着目し、新たな仮説をたて、説得的に説明している。さらに、原形不定詞句を伴う知覚動詞・使役動詞の受動化においては、**to** の出現・消失に関して意欲的に説明を加えようとしている。特に、これらの受動文には **to** が必ず生じなければならないことを **wager-class** 動詞構文との類似性を指摘し、この構文に類似した構造を用いて適切に説明している。

以上が評価すべき点であるが、本論文には問題がまったくないわけではない。たとえば、提案された受動文の構造には、受動文の分析に特別な機能を果たしていない機能範疇が仮定され、それが要素の選択条件に組み込まれているので、この機能範疇を仮定する根拠を示すべきであろう。なぜなら、この機能範疇を仮定しなければ、その要素の選択条件はより簡潔に規定できるからで

ある。また、擬似受動文を分析する際に、DP が Spell-Out 時に前置詞に隣接している場合、前置詞に編入され、その前置詞によって斜格が付与されると提案しているが、そのような編入が可能かどうか、また、複合前置詞内で前置詞が DP に格付与することが可能かどうか検討の余地がある。さらに、一部のデータに関しては、コンテキストを整えることで文法性判断にずれが生じると考えられるものも含まれているので、今後さらに慎重なデータの吟味が必要な箇所が認められる。加えて、ウクライナ語、アイスランド語、ドイツ語の受動文（一種の非人称構文に相当する）の分析では、細部において若干の修正が必要などところがある。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。